

矢嶋美都子先生のご退職にあたって

関 口 勝

矢嶋美都子先生は群馬の名門高女・県立高崎女子高等学校、桜美林大学を経て、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科（中国文学専攻）に進まれ、中国六朝時代の詩人・庾信を中心に研鑽を積まれた。平成10年には博士（人文科学）の学位を取得されている。

昭和54年、亜細亜大学教養部に着任され、以来42年の長きにわたり、本学の中国語教育にご尽力された。この間、人格・教育・研究に秀でた教員に授与される「五島賞」を受賞されている。

学問に対する先生の情熱的でひたむきなお姿は、つねに私たちの敬服するところである。これまでの先生の輝かしいお仕事については、業績書をご覧いただければ一目瞭然である。平成12年に刊行された『庾信研究』（明治書院）は、先生の中国古典詩研究の集大成と言っても過言ではなく、権威ある学術誌の書評で高評された秀作で、中国でも訳書が出版されている。

そのほか平成30年に刊行された『唐詩の系譜 名詩の本歌取り』（研文出版）がある。唐代の著名な詩の本歌を探し、その作品を系譜として整理を試みたもので、高校の漢文の教科書に採録されている馴染み深い作品が多く紹介されていたため、門外漢の私も一気に読了してしまった。一読をお勧めする次第である。

先生は国内の学界のみならず、中国でも名を馳せる漢学者であり、優れた漢詩人でもある。しかも即興で自在に詠むことがおできになる「奇才」である。その詩風は、「詩中に画あり、画中に詩あり」と評された盛唐の

詩人・王維を彷彿とさせるものであり、これは先生の業績書の整理をお手伝いしていた際、先生の学部卒業論文が王維を題材に執筆されたことを知ることにより合点がいった。

先生は達筆である。「書」も嗜まれた。その躍動感に溢れる筆法からは、天空海闊、竹を割ったような先生のお人柄がうかがえる。察するところ、書聖・王羲之をお手本に稽古を積まれたに違いない。

旅行、中国民族楽器琵琶の演奏、韓流ドラマ鑑賞など先生は多趣味であるが、なかでも旅行は、余暇を利用され、中国旅行は50回を超す、と誇らしげに笑みを浮かべておっしゃっていた。そのほか世界各国を旅行され、見聞を広められた。

わが家では毎年アドベントが近づくクリスマスをモチーフとした大きく美しいタペストリーを居間の壁に掛けることにしている。このタペストリーは先生から米国旅行のお土産としていただいたものである。先ほどちょうどこのタペストリーを片付けていたとき、いつもと違う思いが生じた。それは今春先生が大学を退職されるという寂寥の念に襲われたためであろう。

今年先生からいただいた年賀状には「これからは私に代わって重責を担ってください」と一言添えられていた。微力ではあるが重責を果たすべく、努力をしたいと思っている。

先生のこれまでのご厚情に深謝申し上げるとともに、ますますのご健康とご活躍を祈念申し上げたい。